八抱えの松

古松碑

むかし、ここに大きな松の木がありました。樹齢七、八百年ほどで、高さは百尺（三三メートル）もあり、幹の太さは、大人八人が手をつないでやっと抱えられたほどの大きなものでした。

その根本に「妙見さま」が祀られていましたので、御神木として大切にされていました。

その立派なことは、江戸時代終りの安政五年（一八五八）に発行された『成田名所図会』で偲ぶことができます。

ところが、天保年間（一八三〇～一八四四）にこの松に雷が落ち、元気がなくなってしまいました。

そして、明治二年、台風が吹いたとき、ついに倒れてしまったので、村の人たちはこの松のことを永く忘れないように「古松碑」を建てたのです。

※　古松碑…明治三年十月に建立された碑。高さは、二・一八メートル、巾は、〇・九メートルあり、当時、酒々井町が成田街道宿場駅の一つであったことから「酒々井町古松碑」と言われています。

碑文は、五九〇字からなる漢文で、佐倉藩大参事、平野重久の撰文、書学教師、平林辰協の書によるもの。古松の事蹟、酒の井の由来、千葉氏本佐倉城時代の酒々井町の繁栄の様子を偲んだ名文を刻んでいます。

昭和五十二年三月二十九日に町の指定文化財になっています。

この碑の脇に学校給食センターがあります。

※　成田名所図会…筆者は、中路定俊、定得父子で、成田山新勝寺により刊行されました。

寛政までにおよそ二十年かけて、江戸から成田までの名所、旧蹟、社寺の歴史を克明に記述した書物で、全五巻で構成されています。別名「成田参詣記」ともいわれています。

特に、挿絵は、江戸時代の旧成田街道の様子を描いた大変貴重な資料となっています。